

---

# 殺せない殺戮兵器

春狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殺せない殺戮兵器

### 【Nコード】

N4463W

### 【作者名】

春狼

### 【あらすじ】

殺戮の為だけに造られた兵器、『A-8-10』。

彼の弱点は『他人を殺せない事』だった!!？

そんな彼は当然のように廃棄処分に……!!？

## ・プロローグ・死の予感

なんで俺は生まれたんだ。俺は殺す事しか出来ないのに。傷付ける事しか出来ないのに。

俺を造った奴は言った。

「お前に自由はない」

その言葉を聞いてから……生まれしてから何年過ぎただろう。ある日そいつが言った。

「自由にしてやるよ」

そう言われた。やっと自由になれるのかと安心した。

「使えない奴隷はここにはいらんない」

複雑な電子回路を搭載した金属の脳は、その言葉の意味を素早く解析した。

そうか。俺は、棄てられるのか。

そして俺は廃品スクラップになった。

・プロローグ・死の予感（後書き）

プロローグ、いかがだったでしょうか？

初投稿なのでちよつと自信は…まあ…ね（苦笑）

今後はもっと転がす予定ですが、もし変な方向へ曲がってしまった場合、生暖かい目で見守ってやってください；

よければご感想をよろしくお願いいたしますっ！

- 第一章 - 終わり、始まり。

積もる瓦礫。山になってく。私を埋葬するみたいに。

「あーあ……暇だな……」

この声は誰にも届かない。ここには誰もいないんだから。

……ガシャン。

「今度はなんだろ。カツコイイ男の人が落ちてきたらいいな……  
なんてね」

冗談を言ってみたところで、一緒に笑ってくれる人はもういない。  
つまらないな、なんて呟いてみる。最初は、本当に誰もいないの  
かな、なんて淡い期待もした。でも、もう無駄なんだと知ってし  
まって。悲しくて、悲しくて、その気持ちを誤魔化す事ばかり考え  
てきた。

「だれ……か……た……すけて……くれ……」

ふと耳に入った男の声。

「あれ、空耳が聞こえる？幻聴？あーやばい。私、壊れちゃってる  
？……まあ廃品だもんね。壊れてて当たり前か……」

それでも、その声は聞こえた。さっきよりはつきりと。

「誰か……助けて……くれ……」

助けなきや。相手がどんなモノであろうとも、助けなきや。それ  
が、私が造られた理由なんだから。

・第一章・終わり、始まり。(後書き)

いかがでしたか？

楽しんでいただけたでしょうか？

今後もこんな感じでサクサクと読めるように短めに書いていく予定です。

それでは、次話もお楽しみに

・第二章・誰かに届け、この声よ。

ガラガラと、不安定な台車に乗せられてやって来た場所。金属や部品の山が目の前に広がっている。一緒に働いた仲間の部品も。あれも、これも、みんな棄てられたのか。もう、一緒に働けないのか。俺たちは、いらぬ存在なのか。

ガシャン。

痛みはない。俺はアンドロイドだから。感情は、どこから拉致した人間のデータをインプットしてあるらしい。その人間は、俺の目の前で殺された。高圧の電流を流されて。その時、俺は初めて感情を知った。人工知能のデータによれば、怒りや悲しみといった感情らしい。

……まあ、そんなヨタ話はどうでもいい。とにかく、この状況は不味い。危険過ぎる。

「だ……れか……た……すけて……くれ……」

音声は再生可能らしい。一応。これなら誰かが助けてくれるかも知れない。

「誰か……助けて……くれ……」

声が届いたのだろうか。ガチャガチャと金属の山を踏み越える音が段々近付いてきた。

・第二章・誰かに届け、この声よ。(後書き)

第二章、お楽しみいただけましたか？

今後の展開は……ヒミツですが、どんどん面白くしていきますっ！！  
それでは、次話もお楽しみに

・第三章・大手術開始……でも初仕事！？

「あー……これはちょっと危ないな……」

目の前に転がるアンドロイドは、とても悲惨な状態だった。右腕がもげていて、左膝関節が変な方向に向いている。眼球の部品は本来の位置から飛び出て、回線だけが辛うじて繋がっているため、宙ぶらりんだ。皮膚のシリコンも欠損が多い。

「あ、けどこの人カツコイイかも……じゃなくて！！治さなきゃなんだった！！えーっと……とりあえずメンテナンスだよね……？」

人生……いや、アンドロイド生（？）においてのチャンス到来だ。カツコイイお嬢さんをゲットだぜっ！！！！

「よし、頑張るぞーっ！！……あれ……けどこれって……初仕事だ！！？」

そうして、どうにも危なっかしい大手術が始まった。

・第三章・大手術開始……でも初仕事！？（後書き）

カツコイイお婿さん、ゲットだぜ！！

……どうもです。

お楽しみいただけましたか？

段々と物語が転がり始めました！！

これがどんな方向へ転がるのやら……。

危なっかしいですが……頑張ります！！

## ・第四章・モーニングコール？

「……え、おき…よ」

ぼんやりした視界。

「ねえ、お…てよ」

女の声。

「っあー！！もういいもん！！！！」

ガンツ！！！！

…顔面に衝撃。

「……………？」

ピントを自動で合わせるようにプログラムを設定変更した。

「あ、起きた？」

どうやらこの女が撲つたらしい。手に金属パイプを握っている。

「ん……んー…」

治療用アンドロイドか。作業用アンドロイドが故障した時に働く、アンドロイドの医者だ。

「あ、やっぱりカツコイ…」

しかもこれは厄介だ。愛とかいう理解不能な機能付きの最新型アンドロイド。

「ねえねえ、君、なんて名前？」

不味い。関わったら面倒になること間違いなし。仲間から話を聞いたが、彼らは一回見初めると地獄の果てまでついてくるとか。未恐ろしい機能だ。こんな面倒な機能、どこの発情期の野郎がくっ付けたんだか。とにかく逃げなければ。

「人の話を聞きなさいっ！！！！」

ガコンツ！！！！

『エラー発生。システムダウンします。』

「あ、ヤバイ…」

そして俺は故障した。

・第四章・モーニングコール？（後書き）

どうも。

いよいよ二人が出会いました。

次回、二人の名前があきらかになるはずです。

それでは、『殺せない殺戮兵器』か『君は僕で僕は君……じゃなくて！……』で。

・第五章・殺せない殺戮兵器

目覚めると、やはり先ほど見た女がいた。

「大丈夫……？」

心配しているらしい。誰のせいでもこうなったんだか。

「……ああ」

言った途端、女が抱きついてきた。

「良かったあー……」

戸惑いを隠しきれない。その身体がびっくりするくらい柔らかくて、暖かかったから。こんなに温もりを感じた事がなかったから。

「あ、あの……」

堪えきれずに声を出したのは、面倒な感情が芽生え始めているのを誤魔化すためだろうか。

「あ、ごめんね。私はチカ。治療の治に叶うで治叶。よろしくね」

名前を聞いた覚えはないんだが。

「ところで君、なんて名前？」

「A - 8 - 10」

「コードじゃなくてさ。名前だよ、名前」

「名前……？」

そういえば俺には名前がない。A - 8 - 10。それが『名前』だった。

「もしかして君、作業部門？」

「……そうだけど」

それがどうしたというのか。訳が分からない。

「作業部門には名前がないんだよ。そういえば、作業部門って色々噂があるんだよね……」

初めて知った。だがそんな事はどうでもいい。知られてはいけない事かも知れない。

「噂？」

「そう、噂」

「あのね、作業部門のアンドロイドって、極秘だけど実は殺戮兵器も混ざってるんだって。怖いよねー」

その噂は真実だ。現に、俺がその殺戮兵器なのだから。

「…知ってしまったか…その話を」

「……え？」

戸惑うのも無理はないだろう。彼女にとって、その話はただの噂なんだから。

「救ってもらったのに済まない……だが、俺はその話を知っている者を排除しなきゃならない。俺はそのために造られた殺戮兵器だから。義務だから…仕方ないんだ」

そう言っただけ俺は彼女を殺そうとした。だが。

「…なん…で……う…ごけな…い…？」

殺そうとしても、身体が言うことを聞かずに動いてくれない。今にもデータが飛びそうだ。

「……クソ……」

殺そうとしたというのに、彼女は心配そうにこちらを見ていた。

「……大丈夫…？」

止めてくれよ。そんな泣きそうな顔されたら、こっちだって困るだろ。こんな風に接してもらった事なんか一度もなかったんだ。

わけがわからん。俺はお前を好きになっちまったらしい。本当にどうしてくれるんだよ。

「……クソ……！！」

・第五章・殺せない殺戮兵器（後書き）

すいません。

今回で二人の名前を出すつもりだったんですが…。

…次回こそは出します…!!

## ・第六章・狂った殺戮兵器

数日前の出来事だった。

「殺せないならあれは廃棄するべきだろう？」

「ですがあれは……」

会議室での出来事。机を囲んだ幾人かの関係者達が話し合っていた。

「……あれは、狂っています」

それは、『A-8-10』というアンドロイドについての会議。

「だから何だ？ 私達に刃向かうというのか？」

議長らしき人間が言う。笑いを含んだ口調で。

だが、彼は知らなかった。これから起ころうとしている事を。

「『A-8-10』を廃棄せよ」

彼は幹部の人間らにそう伝えた。

・第六章・狂った殺戮兵器（後書き）

数日間ブランクを作ってしまった、すいませんでした。

そろそろ名前を出したいです…。  
でもキャラが動かないっ…。

- 第七章 - 告白。

どれほど瓦礫の山を穿ち続けただろう。

「大丈夫……？」

この女は、どれほど俺に優しくするつもりなんだ。こんなただのガラクタに、なんで親切にしようとする。苛立ちや絶望が込み上げてきて。

「うるせえんだよ！！放っておいてくれよ！！！！なんでお前はこうやって俺に接してくる！！？ワケわかんねえんだよ！！！！！」

女は、ビクツと肩を震わせた。

「ごめんね……」

その目には、大粒の『涙』が光っていた。

罪悪感。これがこの女の、アンドロイドとしての力かも知れない。ホルモンだ何だのモノを分泌して……とか言うのかも知れない。そうだと知っていても、女を抱きしめずにはいられなかった。結果はどうなったとしても、俺は……

「……ごめん」

俺はこの女に騙されても構わない。

「ごめん……でも、好きだ」

俺は、こいつの冷えきった部分を暖められるくらいの男になりたい。

・第七章・告白。(後書き)

イキナリです。

はい…頑張っていきましょうー…。

・第七章・名付け親

「さてとー……名前決めなきゃ呼びにくいもんねー…どうしよ？」

「なんで名前なんか……」

「旅しよ？」

「は!？」

ここはスクラップとなったアンドロイドが棄てられる場所。

運良く?修理してもらっ……されちまった為、現在ここから逃げようという話のまっ最中で。

「だから、旅、しよ？」

なのにこんな話になっていて。

「ふざけんな」

「だから、名前いるよねっ」

「いらねえって」

とまあこんな会話が続いてるわけで。

「んー………A……あ……8……はち……や………10……じゅじゅ……」

じゃないよね……と、だ!……!」

とかなんとかぶつぶつ呟き始めて。

「人の話を聞け」

「アヤト!!!!アヤトだ!!!!!!」

「いや、だから聞けって」

「………イヤ？」

「そっいうわけじゃ」

「じゃあアヤトッ」

「……はあ………」

俺の名前が決まっちゃった。

- 第九章 - 心の叫び

目を開けると、誰かが俺を心配そうに見つめていた。誰なのか知っているのに、名前が思い出せない。愛していた女の名前を、俺は思い出せない。なんでだ。なんで思い出せない。あの日、あの場所で彼女と離れ離れになって。それから彼女の存在は彼女を知る者どころか、すべての記録から消されていて。だからこそ行方不明者ではなく、『最初から存在しなかった人間』になったわけ。俺自身、今彼女を見た瞬間に彼女の存在を思い出した。

「大丈夫……？」

この声。間違いなく彼女だ。

「……ああ」

声が勝手に出た。最初は理解できなかったが、だんだんと解り始めた。

「良かったあー……」

彼女が抱きついてきた。でも、その柔らかさも、暖かさも感じられなかった。

「あ、あの……」

まただ。また声が勝手に出た。戸惑ったような声。

「あ、ごめんね。私はチカ。治療の治に叶うで治叶。よろしくね」  
違う。それは君の名じゃない。

「ところで君、なんて名前？」

君の名は、『治叶』じゃない。

「A - 8 - 10」

違う……

「コードじゃなくてさ。名前だよ、名前」

「名前……？」

違う……！！

「もしかして君、作業部門？」

「……そうだけど」

「作業部門には名前がないんだよ。そういえば、作業部門って色々噂があるんだよね……」

「違う！……それは君の名じゃない！……君の本当の名は……」

そこで俺の意識は闇に吞まれた。

- 第九章 - 心の叫び（後書き）

色々のご心配をおかけしました・・・。

もう大丈夫なのでこれからも連載を続けていきます！！

それではまた！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4463w/>

---

殺せない殺戮兵器

2011年11月20日03時22分発行